

# 日本環境教育学会「原発事故後の福島を考える」プロジェクト

## 第7次調査報告書

- 1) 日 時：2019年10月4日（金）～6日（日）
- 2) 場 所：福島県いわき市常磐湯本町、福島県郡山市街池台、福島県田村郡三春町、福島県南相馬市鹿島区, 原町区
- 3) 参加者：10名

### 4) 概 要

本調査は、毎年2回の頻度で最低5年間継続するとして福島訪問調査の第7次調査であり、3日間の日程で行った。1日目は、岩惣旅館の女将に「フラ女将の取り組み」の経緯をお聞きし、いわき市役所常磐支所長より湯本地区の復興における行政の役割についてお聞きした。2日目は、郡山女子大学の柴田先生より原発事故後の福島県の自然保育についてレクチャーを受け、山形県米沢市で県内の子どもたちの自然体験学習の受け入れをしている「青空保育たけの子」に訪問し活動の経緯を伺った。3日目は猪苗代町にある「Rootsの森プレーパーク」のプレーリーダー大室由佳さんに活動の経緯やライフヒストリーを伺った。

### 5) 訪問地 MAP



10月4日（金）1日目

13:00～14:00 岩惣旅館（福島県いわき市常磐湯本町吹谷39）



大場ますみさん



聞き取りの様子



イベントポスター

大場ますみさん（岩惣旅館/フラ女将）から原発事故後の作業員受入の様子を伺い、岩惣旅館では当時の板前さんの理解や協力もあり、10畳に5人、2食付き（朝食は4時）を条件に、1件の原発作業員のグループを受け入れたそう。また、大場さんはフラ女将の中心人物の一人として活躍し、現在も活動を続けている。フラ女将は、いわき湯本温泉の女将さんたちが東日本大震災の困難を乗り越えるために立ち上がり、2015年には「いわき湯本温泉フラのまち宣言」を行い、フラダンスを中心とした「フラのまちオンステージ」の開催等で湯本のまちを盛り上げている。同席した小井戸英典さん（旅館こいと）は、女将さんたちが表舞台に立ち目立ってしまうことに対して少し抵抗はあったものの、女将さんらの情熱を受け、「背に腹は代えられない」と、活動を応援したその当時を振り返る。2018年には、プロサッカークラブ「いわきFC」等と協力したプロモーションビデオが完成し、ハワイからの反応もいいそう。他にも、カウアイ（ハワイ）と国際交流フェスティバルを行うなど、フラ女将のPR連携は国内外へと広がり、いわき市全体でフラを核にした地域づくりが期待されている。

16:00～17:00 いわき市役所常磐支所（福島県いわき市常磐湯本町吹谷76）



千葉伸一郎さん



いわき市役所常磐支所



いわき湯本温泉「月まつり」

千葉伸一郎さん（いわき市役所常磐支所長）から、行政からみた、いわき湯本温泉の現在についてお聞きした。千葉さんは湯本町の出身で、これまでの本庁観光交流室長の経験を活かし、常磐支所としてフラ女将さんや湯本全体の地域活性化に関する活動の支援を行うだけでなく、千葉さん個人として

は、震災を機に知りあった方とのご縁のなか復興支援活動を精力的に活動されている。ユニークな取り組みとしては、2018年11月、男性によるフラダンスチーム「背広 de フラ」を立ち上げ、支所職員、観光交流室の職員をはじめ、まちの大工や旅館の従業員へと徐々に広がり、現在12名のメンバーで活動している。湯本のまち全体で盛り上がっていくことが常磐支所の現在の命題であり、活動をサポートする中で旅館街と商店街がつながっていく手ごたえを感じているという。次に、原発事故後の観光の現状について、未だ観光集客は震災以前から6割に留まり、さらに湯本温泉の宿泊者数に繋がらないことは喫緊の課題であり、実際に旅館8件は廃業・売却したという。また、湯本温泉の旅館でも泊食分離が進む中で、商工会議所「チャレンジショップ」（空き家等を使って起業したい人への支援）等のアイデアを活用するなど、湯本のまちの外出産業を充実させる可能性もあるという。他にも、インバウンドを対象に「原発スタディツアー」を模索しているところであり、世界中から観光客を呼び込む可能性があるという。現状、こうしたツアーの受け入れは事前申込のみの対応に留まり、今後は、募集型・受注型企画観光へと旅行形態を広げられるかが課題であるという。

聞き取りの後は、第57回「いわき湯本温泉月まつり」に参加した。

## 10月5日（土）2日目

### 10:00～12:00 郡山女子大学（福島県郡山市開成3-25-2）



柴田卓さん



報告の様子



郡山女子大学

柴田卓さん（郡山女子大学）から、今までの取り組みや調査について話題提供をいただいた。大学間連携事業としては「アカデミアコンソーシャルふくしま」といった福島大学・郡山女子大学短期大学部・桜の聖母短期大学の3校連携で宮城県白石市にあるキッツ森のようちえんで自然体験活動を行い、子どもと自然に関わることの意義について話を伺った。地域連携事業としては福島県小野町の「おのまちわかばたんけんたい」といった地域での自然保育を通じ地域資源の再発見を行う事業について話を伺った。

柴田さんの調査の概要としては、福島県内にある幼稚園・子ども園・保育園・保育所に調査票を送り、有効回答を得られた309の施設の結果を集計したものである。質問項目は幼児の外遊びや自然体験の現状、課題、要望などである。調査結果から保育者が自然体験活動を行う際の障壁は場所や交通手段の確保、自然リスク対策が大きいことがわかり、その対策として保護者や自治体、専門家等を巻き込むことが有効ではないかといった提示があった。また、自然資源としての「場所」を見直すこと、自治体や保育現場と保育者養成校等が連携できる体制を整えることが課題であるという。

14:00～17:00 青空保育たけの子（山形県米沢市大字上新田 1 1 6 6）



辺見妙子さん



古民家



冒険遊び場

辺見妙子さん（青空保育たけの子）に、青空保育たけの子の活動経緯と活動内容についてお聞きした。辺見さんは2009年4月から福島市の自宅を開放して野外保育を行っていた。しかし震災後、放射能の問題や避難者の増加に伴い2011年10月から山形県米沢市に拠点を移動して活動を始めた。米沢市にある現在の活動場所は敷地内に古民家と冒険遊び場、畑があり子どもたちが自由に遊べるようになっている。また、古民家ではカフェや民泊があり保育園を利用していない人でものびのびと遊べる場所や安全な食を享受することができる。保育園の活動は週5日、10:00～14:30となっている。震災後から始めたバス送迎の料金は無料である。そして震災後保護者会の回数も月1回から2回に増やされた。これは辺見さんが経験した放射能に対する意識のずれから、子ども達や保護者には過ごしやすい場所を提供したいといった思いによるものであろう。また、辺見さんは風景構成法の研究も行っており、自然体験によるこどもの絵の変化についてもお話を伺った。

現在森のようちえんのような自然保育型の園を卒園し小学校に入学する際、環境の違いに対応できるかという問題（接続問題）が生じている。不登校の子だけではなく、従来の学校教育とは異なった教育を受けさせたい保護者や子どものためにも小学校を作ることが将来的な目標である。

10月6日(日)3日目

10:00～11:30 Rootsの森プレーパーク(福島県耶麻郡猪苗代町字清水前2748-1)



Rootsの森プレーパーク



プレーパークの約束事

大室由佳さん(Rootsの森プレーパーク)に、ご自身のライフヒストリーと「Rootsの森プレーパーク」の成り立ちについてお聞きした。「Rootsの森プレーパーク」には、焚火スペースや工作ひろばがあり、小川が流れるフィールドである。ここでは、子どもたちがのびのびと思い切り遊べるように、禁止事項を極力なくし、子どもたちが自由に遊べるよう支援するプレーワーカーが1名(大室さん)配置されている。また、プレーパークがあるRoots猪苗代には、工務店とShopとカフェが併設されている。大室さんからのお話の中で、常に開かれ、誰でも来て自由に遊ぶことができるプレーパークの重要性やプレーパークと地域活性化との関わりが指摘された。さらに、薪の調達等プレーパークでの放射線対策についてのお話を伺った。